

内藤記念くすり博物館だより

資料紹介

2009年度企画展「江戸に学ぶ からだと養生」

18～19世紀のヨーロッパでは、人間の身体の仕組みが科学的に解明され、医学・薬学が飛躍的に発展しました。医学・薬学の新しい知識や情報は、日本へも蘭学という形でもたらされました。それまで信じられてきた五臓六腑とは異なる身体の構造に人々は驚き、それらの知識はやがて庶民の間にも広がりました。

その一方で、当時は身体をいたわり、長生きするための方法として、養生法があり、身体や健康管理への関心が高まっていました。日常生活に留

意して健康の増進をはかることは、今日の予防医学に通じるものがあります。

今年度の企画展は、『解体新書』など江戸時代の蘭学に関連する資料、また、『養生訓』などの養生についての資料を展示します。江戸時代の人々が、どのような思いで『養生訓』を読んだのか、また人々が身体や健康についてどのように考えていたのか、そして、どのように健康管理を行っていたのか、理解を深めていただけましたら幸いです。



ごたいわごうしんさいのきょうくん
▲五體和合心膺之教訓 歌川芳勝画／文久2年（1862）／36.7×49.5cm

両手、両足、頭、背中など五体をそれぞれ家族の一員とみなして、一致協力して働くことが心身健康の源であると説いている。

<錦絵に描かれた体>

錦絵は、庶民の興味、人気、関心事などを取り上げて制作されました。その時代の社会情勢、庶

民の動向を伝えてくれます。身体の働きについてもその戯作者によって工夫がこらされ、絵柄も目をひくようなものが多く見られます。



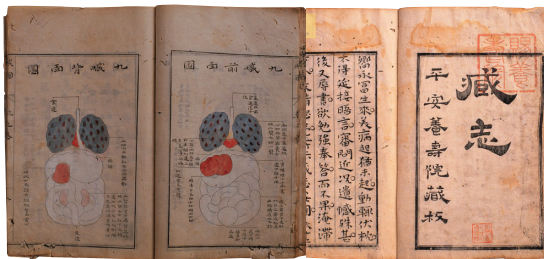
いんしょくしょうじょうかがみ (左) ぼうじょうしょうかがみ (右)
 ▲飲食養生鑑 (左) 房事養生鑑 (右)
 歌川国貞画／江戸後期／50×37, 52×37cm
 体の中の様子を小さな人が説明している。飲食養生鑑では臓器の役割を紹介し、暴饮暴食など日常生活の不摂生をいさめている。



しんがくみのようじん
 ▲心学身之要慎 落合芳幾画／江戸後期／36.4×75.2cm
 目、鼻、耳、口、手、足など人間の身体の部分が、駄洒落（だじゃれ）を交えながら、口々に自分が身体の中で一番重要であると言いつつ合っている様子が描かれている。滑稽本作者の仮名垣魯文が文章を書いている。

<体の中を観る>

江戸時代の医学界に、臨床経験を重要視する古方派と呼ばれる一派がありました。古方派の一人・山脇東洋は、五臓六腑説に疑問を抱き、宝暦4年（1754）に京都の六角獄舎において行われた日本最初の人体解剖に立ち会いました。山脇東洋はその時の記録を5年後に『蔵志』として出版しました。図に記し、五臓六腑説の誤りを明らかにしました。



▲『蔵志（乾坤之巻）』／山脇東洋（尚徳）著／
宝暦9年（1759）日本で最初の実証的な解剖図誌

その後、明和7年（1770）には古河藩の藩医・河口信任が『解屍編』を著しました。

その翌年、明和8年（1771）には、杉田玄白、前野良沢、中川淳庵らが江戸の小塚原で行われた解剖に立会いました。その際持参したオランダ語の解剖書『ターヘル・アナトミア』の中の解剖図が実物そっくりに描かれているのに驚き、翻訳を決意したといわれています。

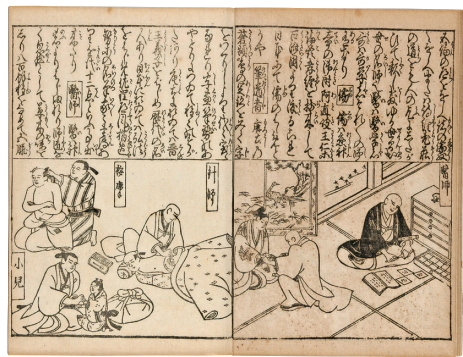


▲『解体新書』 岡見武忠（クムス）撰
杉田玄白他訳 安永3年（1774）
全5冊のうち、第1冊が序図篇で内臓諸器官が
図示され、第2～4冊が解説篇である。ドイツ
人・Adam Kulmus（1689-1745）著のドイツ語
の解剖書を、1734年、オランダ語に翻訳した
「Ontleedkundige Tafelen」（解剖学表）を翻訳
したものの。

<体の治療>

江戸時代には医師や薬だけでなく、様々な治療法がありました。鍼灸や按摩は庶民にとって身近な治療となりました。特に艾を使ってツボに灸をすえることは家庭で行われるようになったようです。

この時代は漢方医が主流でしたが、幕末から明治にかけて漢方医だけでなく、西洋医学を学んだ医師も次第に増えていきました。漢方医学による外科は外傷や皮膚炎、火傷などの処置が中心でした。しかし、華岡青洲による麻酔薬を用いた外科手術は当時の医学界に大きな衝撃を与えました。



▲『人倫訓蒙図彙』 人倫訓蒙図彙は一種の図鑑で、
人々の職業を図で解説している。医師が薬箱から
薬を出し調合している様子である。鍼師は十四経に
基づいて体の異常を整えるとされる。小児は小児
を診る医師で、諸々の医師の中で一番難しいと書
かれている。



▲華岡痛着色図／江戸後期／写本
華岡塾の塾生による写本。塾で診察を受けた患
者の病気の状態が描かれている。麻酔薬“通仙
散”を使った乳癌の手術の図もある。

<体の養生>

養生とは肉体ならびに精神の安定をはかること
によって健康を保ち、日頃から病をよせつけない
ような体を維持することです。その原理と方法を
述べているのが養生書で、貝原益軒（1630-1714）
の『養生訓』（1713年）は、多数出版された養生
書の中でも有名でした。それはこの書には、当時
の人々が理想として目指すべき生活態度につい
て、具体的な方法が紹介されていたからです。貝
原益軒はこの書の中で、欲望のほしのままに生き
るのではなく、自制して無病長寿を目指して、肉
体的にも、精神的にも慎重に生活することが重要
であると説きました。



▲『養生訓』巻第1-8・附録 貝原益軒編録
文化9年（1812）版
貝原益軒は江戸前・中期の儒学者で、医学、本
草、農学など自然科学に造詣が深かった。

企画展

「江戸に学ぶ からだと養生」

会 期 2009年5月14日(木)～
2010年3月28日(日)
会 場 内藤記念くすり博物館
展示館2階 企画展示室



内藤記念くすり博物館

〒501-6195

岐阜県各務原市川島竹早町1

開館時間：9:00～16:30

休館日：月曜日／年末年始

TEL：(0586)89-2101

FAX：(0586)89-2197

ウェブサイト「くすりの博物館」

<http://www.eisai.co.jp/museum>

